

旭
18
4



落ち行く人

久米正雄

若い學生時代の三年を、あの本郷の向ヶ岡で過した者には、煤けた褐色の寮室に、夜々ほのめく燈の光も、却々に忘られないもの、一つである。

秀夫が、その秋の初め上京した頃には、もう一年當時のやうに、時計臺に對して純な情緒を唆られるやうな、純朴な心は餘程薄らいで居た。が、夫でも百日に近い夏期休業の間、山陰道の暗い山懐に、單調な生活を送つて、感覺の飢饉を感じて居た彼には、本郷通のアスファルトの舗道も踏み行くにさへ心が躍つた。

青木堂のシュー・クリームや、一白舎の香の高いブラジル産の珈琲の味などが、彼が入るべき二年生生活の豫感として心に浮んだ。その頃、まだ電車は學校の門迄通じて居なかつた。

三丁目で電車を捨てた彼は、一種の型にはまつた一高生の歩調を取つて歩み出

した。然し秀夫は傳統的な一高生たるべく、餘に纏綿な華奢な身體と、瀟洒な顔を持つて居た。彼はふと、ある書店の店頭で足を止めて、新刊の雑誌の頁を弄りながら、紙片の快い手ざはりや匂から、新しい都會生活の香味を求めようとして居た。すると、

「おい相馬君」と後から彼の肩を叩いた男があつた。

「やあ、太田かい」と秀夫は、快い微笑を満面に湛へながら、海水浴で眞黒にして居る太田の顔を見た。そして二人は連れて立つて歩き出した。

「何時来たんだい？」と太田は訊いた。

「今来たばかりだよ。見ろ！カバンを持つて居るぢやないか。君は？」と秀夫は問ひ返した。

「僕は一昨日来た。まだ寮には電氣が點火かないせ。僕は一人で蠟燭生活をやつて居たんだ。君も、南寮組なんだらう」

「さうだ」と秀夫は肯いた。

「山岡の奴、この休みに國で赤痢に罹つたんだつてね」と太田は笑ひながら云つた。

「ほう！山岡が」

「彼奴が、やりさうな病氣さ。彼奴のやうにイカモノ喰ひをやれば、何にだつてなるさ。山岡はステキなおでんや通だつてね。本郷と下谷のおでんやなら、一高の山岡さんで通るんだつてね」

「ふ、ふ、ふ」と秀夫は苦笑した。秀夫は、平生から同じクラスの山岡に對して、可なり激しい反感と輕蔑を懷いて居た。秀夫は、一高生と云ふ看板の下に隠れてやる、山岡の野卑な下司な行動が嫌であつたのである。その上、秀夫はクリスチャンであつた。父が、眞摯な信者なので、秀夫の信仰は生れな

い先から極められて居た。嚴格な父は、秀夫の中學時代には、極度の干渉と、またその嚴しさを補ふ丈の愛情を注いで居た。従つて、彼の心は處女のやうに感受的であつたが、外面丈は清教徒的の假面を被つて居た。

だから、彼には多年憧憬して來た一高全部を、無條件に受け入れる事は何うしても出来なかつた。夫に、彼は藝術的には可なり洗練された情緒を持つて居たから、夜寢室から寢室を荒して歩、ストームや、何日も上げ下しをしない萬年床や、僅かばかりの忿怒から學生の體面を抛擲してしまふ賄征伐などに對しては、夫となき反感を懐かすには居られなかつた。従つて、彼はおでんやなどに立寄る山岡に對しても、いゝ感じは持つ事が出来なかつた。

「年度の部屋には、その外に杉野が來るだらう。彼奴はあれで日本派の俳句ちや有名なんだとさ。此間も、淺河宗匠と云つて冷かしたら、奴參つて居たよ」と、太田は可なり快活に語り續けた。が、秀夫は何となく野卑に見える山岡や杉野なども、同室する事を考へると、稍軽い不快に囚はれるのを、何うする事も出来なかつた。

「僕は俳句なんかには、何うしても安住する事は出来ないね」と、秀夫は杉野などに對する不快を、妙な非難に換へて發表した。

「だから、杉野ももう止すんだつて。氣の利いた奴は、もう俳句なんかやらないんだつて。杉野は劇をやるんだつて。彼奴、あれで却々劇通なんだとさ。明治座なんか毎月缺かさなかつて、大の高島屋びいさだつて」

「さうかい」と、秀夫は返事をしたが、彼には高島屋と云ふのは、誰の事だか分らなかつた。

「山岡と杉野とそれから」と秀夫は同室に入るべき顔觸を訊いた。

「安本に成田、近藤君」と太田は指を折りながら答へた。

「近藤君も來るのかい。あの人は嫌に黙つて居るね」

「だから、杉野の奴、近藤ザ・サイレントと云つたよ。實際あの人が一年に話す分量よりも、僕達が一年間に話す分量の方が多いよ」

「本當に。然し今年から文科の者はかりだからいゝね」と秀夫は稍華やかな新生活の希望を感じた。

「兎も角、面白く暮さう！それに南寮は室もいゝからね」と太田は、愉快さうに新學期の生活に關して色々な豫想を語つた。

が秀夫は、太田の話に調子を合せて居たものゝ、自分が一年時代に送つたやうな、善良な冥想的な生活が、送れるか何うかを怪しんだ。

二

夏休の間、假死に陥つて居た寮は、今日覺めた人が眼をしばたゞやうに、全ての窓を悉く開いて、初秋の清麗な空気を、身體一杯に吸ひ込むのであつた。

寮の窓からは、蝕ばみそめた櫻の葉が、時々風もないのに、室の中へ舞ひ込む時もあったが、然し窓の直ぐ下から、運動場迄續いて居る芝草の敷物には、まだ充分に秋が浸み込んで居なかつた。

學期初の興奮が、皆の心に渦巻いて居る頃とて、夕暮などには、この草原に集つてふとした議論に、夕闇の葉の忘れぬ事などもあつた。

「何んだ安本！また貴様の直覺がい。幾何ベルグソンが直覺を重んじて、直覺にも區別がある。野蠻人の直覺は野蠻人の直覺さ。貴様の直覺は貴様の直覺さ。天才の直覺にして初て價値があるのだ」と山岡が早口に安本をやり込めると、安本はこの頃覺えた江戸つ兒式の口調を弄して、

「何だべらぼうめ！山岡なんか判りやしないんだ」とやり返した。

「兎も角、君が利他主義などを、擔ぎ出すやうぢや駄目だよ。利他主義に絶対の立場なんかあるもんか。人間は皆利己主義さ。只利己を行ふのに、手段として利己を行ふか、利他を行ふか、問題なんだ」と山岡は、右の手で芝生を叩きながら高聲を揚げた。

「ぢや貴様、聖徒の生涯は何うしたのだ」と、安本は負けずに大きい聲を出した。

「自分の宗教的信念を満足させようと云ふ利己的動機からさ」と、秀夫は手もなく撃退した。

「俺は、彼等の心に利己的分子のない事を、直覺に依つて認めるのだ」と、安本は又喚き立てた。

「また安本のお得意の直覺だね。彼等が自分で、利他、利己を自覺して居るか何うかは、問題でないよ」と山岡は冷静に答へた。

秀夫は、初からこの二人の亂暴な議論を聞いて居た。彼は山岡の人間は既に利己的であると云ふ結論を、可なり大きい獨斷として、排斥せずには居られなかつた。が夫と同時に、彼は山岡の徹底した態度を、何となく快く思はずには居られなかつた。

その夜、隣室の新人生との、茶話會が果て、後、皆はどや／＼と、二階の寢室へ上つた。寮歌を餘り強く歌つた爲か、皆聲を哽して居た。皆、ガ／＼と談笑しながら床に入つた。すると杉野は不意に、

「池田と云ふ奴はシャンだね」と云つた。すると杉野と顔を突き付けて寢て居る山岡は、

「うん。シャンだね」と無條件に合頷を打つた。室の皆は哄笑した。が秀夫は笑ふ氣になれなかつた。秀夫には、シャンと云ふ言葉が心の羞耻なくしては、聞かれない言葉であつた。夫は獨逸語の美麗と云ふ言葉から轉化した言葉で、美貌と云ふ意味と美少年と云ふ意味の、二つを持つて居た。

「い、聲だね、彼奴のローレライはよかつたね」と、山岡は可なり感に堪へたやうに云つた。

「獨逸協會だつてね」と、杉野はまだ電燈が消えたばかりの闇の中から聲を出した。

「さうかい」

「名は、慎二と云ふのだ。また十八だせ」と杉野は、池田と云ふ少年に就て可なり精しく知つて居るらしかつた。

「おい杉野、随分研究したんだね」

「何！研究も何もあるものか。攝生室へ行つたら、彼奴が來て居たんだ」

「何うだか、貴様は野心家だからな。が、兎に角、俺は美しい人間を最も崇拜する。美貌は天才よりもよいのだ。天才は表現の力を要するが、美貌はその儘で藝術品なんだ。たゞ悲しい事は、天才は美貌よりも長續きがすると云ふ事だ」山岡は、宣言でもするやうに、床の中で呶鳴つて居た。秀夫は先刻から杉野と山岡との、無遠慮な話を可なり不愉快に聞いて居た。が今迄輕蔑して居た山岡が、機智的な警句を吐いたのに、可なり駭かされた。すると山岡は、

「何！こりや、俺が云つた事ぢやないんだ。一寸オスカア・ワイルドを翻譯した丈だよ」

「道理で、貴様下しぢや、氣が利き過ぎて居ると思つたよ」と杉野が云つたので、皆は哄笑した。

「美は善よりもよいのだ。然し善は醜よりもよいのだ」と山岡は又高聲で叫んだ。

「やつぱり、同前だらう」と杉野が囁いた。

「もとよりさ。オスカア。ワイルドは曾てヴェルレーヌに逢つた事がある。然しヴェルレーヌが、餘り醜惡であつたので、二度と再び逢はなかつたとさ。ヴェルレーヌも、ワイルドに逢つちや堪らねいね。ラムボオに捨てられるのも無理はないさ」

「ちや山岡自身も、幾何ワイルドを崇拜したつて、相手にして貰ふ事は難しいね」

「そりや夙より悲觀して居る事だ。まづこの部屋ちやワイルドを崇拜する資格のある者は、先づ相馬君丈だね」

「おい俺を忘れちや困るせ」と、今迄大人しくして居た安本が急に口を挟んだ。

「なんだ安本かい。鏡と相談しろよ」と、杉野が横から口を入れた。皆はドツと笑つた。秀夫は、自分の容貌を無類に批評されたことに對して、反抗しようとしたが、彼の努力に拘はらず、不快な感情は湧かず、一種の誇に近い感情が起つて來た。が、彼は同室の野卑な談話から、自分の純な感情を努めて保護しようとした。彼は、山岡等のデカタン的な思想も出來る丈、排斥しようと思つた。が、夫にも拘はらず、自分の窮屈な感情に比べて、彼等が何事をも自由に大膽に語るのを、何となく羨ますには居られなかつた。

三

見送かす九段や牛込の高臺は、今蒼茫と暮れ惱んで、その裡に水色の光が微かにふくらみ初めて行く處であつた。

本郷真砂町の彌生亭のバルコンには、小さいテーブルが置かれて、秀夫の同室の者は悉く集つた。秀夫は幾度も同行を拒んだが、室の者は、今宵の同室會に秀夫丈が缺席するのを、非常に情しんで皆が口を揃へて勸めたのである。秀夫は、酒を斥けてサイダーを飲みながら、黙つて皆が騒ぐのを見て居た。少年時代から基督教生活に馴れ、酒を惡魔が醸す毒だと思つて居た秀夫には、山岡や杉野が強烈なウキスキーやブランドーを、グレイと飲み乾すのが空怖しい事のやうに思はれて、座に堪へられぬほど不快であつた。

山岡は、もう先刻から可なり酔つて居た。

「禁酒だとか、節制だとか、あんなストイックな肉體虐待は迷信の一種だね。俺には、肉體よりも可愛なものはない。俺は、自分の肉體の爲には何でも犠牲にするぞ」と云ふと、杉野は直ぐ合槌を打つた。

「さうだとも。靈などと云ふのは、人間の負け惜しみだ。凡て物質！凡て肉體！ヘッケル曰く神あらばそれはエーテルの類ならん」と云ひながら、杉野はとんと卓を打つた。

「おいませよ！玻璃盃が、倒れるぢやないか」と、大人しい太田が心配した。すると、之も、先刻から日本酒をコップで、立て續けにやつた爲に可なり酔拂つてしまつた安本が、

「おい杉野！そんな下らない事を云ふよりも、我々のIさんの爲に健康を祈らう」と提議すると、二人は直ぐ玻璃盃を打ち合せながら、

「最も美しい少年の爲めに」と、叫んだ。

秀夫には凡てが、醜惡に感ぜられた。彼の生來の冥想的な、宗教的な感情は、こんな粗奔な享樂的な傾向を露ますには居られなかつた。然し秀夫の苦悶などには、お介意なしに周囲の喧騒は尙續いて行つた。

「一萬のロマンチックなストインズも、もう駄目だね。皆近代的に洗練された感覚や感情を持ちながら、夫でストインズムの假面を被るなんて、寧ろ滑稽だね。慾望の解放！人は若きに返る事無き身を、獨逸の文法なんかで若い血潮の一滴をさへ渴す事を惜しむのだ」ともう餘程酔の廻つたらしい山岡は、右の手を昂然と上げながら呷鳴つた。

「もう、お得意の學生時代享樂主義の傳道なら澤山だせ、夫に、相馬君なんかには、そんな氣焰の飛沫なんか、かけちや可愛いさうだせ」と、少しも酔つて居ない太田が、山岡に注意すると、

「その相馬君が居たればこそさ」と山岡は、一段聲を張り上げて、秀夫の方へと真直ぐに見ながら「君は 그리스チャンださうだが、實際に信仰なんかありますか。いや、君の表面の看板を訊くのぢやない。打ち開けた所を訊きたいんだ。ほんとに、あるんですか。僕には、僕と同じ位の學才と頭腦とを持つて居るのが、天國や復活よりも、もつと奇蹟だと思つて居るんだ。僕はキリスト教徒、夫も女や子供の頭の悪い連中は兎も角、僕達と同じ位の理性を持ちながら、純真な信仰があると云ふのが、不思議でならぬのです。君は信仰と云ふ事を妥協的に解釋しないで、本當の意味で信仰がありますか。僕はキリスト教徒は、普通の人間より、一つ丈多くの偽をつく人々だと思ふのだ。何となれば、彼等は普通人のつかぬ、信仰があると云ふ偽をつくからだ」

秀夫は先刻から、山岡の冒瀆的な言葉を聞いて、劇しい忿怒に襲はれた。彼の身體全體が、忿怒と激情との容器に過ぎなかつた。彼は、實行力を奪はれた人間のやうに、たゞ烈しい感情を抑へながら堪へて居た。

「相馬君！君が清教徒的な生活を送るのは、僕から見れば實に惜しい事だ。僕は顔だつて君のやうにシ

ヤンチャやない。金だつて君のやうに豊富ちやないんだ。それでも及ぶ大歡樂の實を、貪らうとして居るのだ、君のやうな天分を恵まれた人が、そんな悔しめな貧乏な苦い日を送るなんて、他から見れば實に惜しいな。相馬君！君は人生に於て、何んな快樂でも貪り得る資格があるんだ！君は、今のやうに、凡ての快樂を拒んで、何か得る所がありませんか」

秀夫は先刻から、山岡のおせつかい的な、無禮な言葉に最後の辛抱をし盡して居た。

「僕は、先へ失敬するせ」と、彼は急に立ち上りながら、梯子をドン／＼下へ降りた。上から、太田や杉野が、呼び戻す聲が聞えた。彼が戸口を出ようとすると、階下に居た給仕女が、送つて來ながら、「また入らつしやいまし」と云ひながらニコリ笑つた。彼の昂奮した心に、その女が惡魔でもあるやうに拂ひ退けながら、表へ飛び出した。秋の夜の微風が、熱狂した彼の頬を撫でた。

四

秀夫は、その夜早くから寢室へ上つた。同室の者は、却々歸つて來なかつた。彼は奮然として汚濁された群衆から、脱け出して來た積であつたが、さてガランとした寢室に、自分一人で床を取つて居ると、孤獨の淋しさが、しみ／＼と自分を襲つて來るのを感じた。

彼は、自分一人でグツと頑張つて居られるやうな、強い意志を持つて居なかつた。少年時代から周圍や教養は、彼をしてストイックな清教徒的な假面を被らしめたが、本當の彼は感受性に富んだ繊細な感情を持つて居た。

秀夫は、獨り床の中に横はりながら、自分の過去を考へて見た。今宵秀夫は、山岡や杉野などの享樂的

な感覺生活を唾棄して來た。

が、自分のストイックな傾向は本物だらうか。さう考へると、彼は過去の自分の中に如何にも誘惑に負け易い、弱々しい少年を見出した。

彼の父は、彼から凡ての歡樂を遠ざけようとした。夜歩きを禁じた、活動へ行く事も禁じた。が、彼は心の裡で、何れほど夜の散歩に憧れ、活動寫眞を見たがつた事だらう。彼は中學時代を、品行方正な眞面目な手堅い學生としてのみ過して來た。が、彼は心の裡で不良少年達の放縱な生活の樂しみを、何れほど羨んで居ただらう。彼は父から歡樂を遠ざける事を教へられ、彼は今もさうする事を、努力して來た。が、彼の眞底の感情は、ほんたうに彼の努力を裏付けて居ただらうか。

彼は、今日も山岡の言葉に對して、猛然として座を立つた。が夫は彼が清教徒的な看板の爲の見得ではなかつたか。彼は心から山岡や杉野の享樂しつゝあるカンヱー生活を憎んで居るだらうか。否、彼は野卑な同室者の態度をこそ憎め、あの觸るれば壊れたんほど繊細な玻璃盃に注がれた酒を、彼は何れ程、快く眺めた事だらう。自分も、本當は一個の若い享樂主義者ではあるまいか。さう思ふと、秀夫は同室の中で、自分一人が本當の感情や感覺を偽つて居る偽善者のやうに思はれぬでもなかつた。殊に彼は、山岡の基督教に對する冒瀆的な言葉を、憎んだものゝ、自分の容貌を賞讃した彼の言葉の方が、もつと自分の眞底に觸れて居るやうに思はれた。

「人生に於ては何んな快樂でも貧る資格がある。秀夫は山岡の言葉を繰返した。すると彼は、凡ての快樂を拒否して、暮して來た乾燥な自分の中學時代が、歷々と自分の前に浮んで來た。彼は高等學校時代も大學時代も、否人生凡てを中學時代のやうに、灰色に塗り消してしまふのは、實に堪らない事だと思つた。

た。

彼は、自分の身が急に淋しく感ぜられた。彼は一層思切つて、生活の様式を換へ、華やかな享樂的生活の渦中に投じて、山岡等をアツとはせてやらうと思つたりした。が、自分が飲酒の癖を獲る事を怖れて酒淫に漬けた物をさへ、自分に喰べさせなかつた両親の事を思ふと、彼は心が闇くなつた。やつぱり俺は今迄の生活を續けて行かう。勇ましく自分の慾望と戦つて行かう。野卑な享樂主義に飽く迄も反抗して行かうと彼は思つた。丁度その時である。調子外れに寮歌を歌つて居る杉野を先頭に、部屋の誰彼はドヤ／＼と歸つて來た。秀夫は寝たふりをしてちつと息を凝した。山岡は秀夫を怒らせた事は、スツカリ忘れてしまつたやうに。

「相馬君はもう、眠たんだな。あたし若さを寄宿舎の、藁のベットに寝るぞいな」と、歌ふやうな調子で云ひながら、入つて來た。

皆は、ガヤ／＼と騒いで居る。蒲團の中に眠つた振をして居る秀夫は、妙な壓迫と淋しさを感ぜざるを得なかつた。

五

その事があつてから、十日ばかりの後であつた。同室の者は秀夫を除く外、皆一所に酒を飲みに行く相談をした。

彼等はこの前の秀夫の行動に懲りて居ると見え、誰も秀夫に同行を勧めなかつた。所が前の夜秀夫を怒らせた山岡ばかりは、また秀夫を誘ひにかゝつた。山岡は、秀夫が當惑して、ムキに謝絶するのに就

て妙な興味をさへ感じて居るやうに見えた。が、その夜は山岡が、「一言勸めると秀夫は直ぐ承諾した。「我黨の士だ！」かう云ひながら、山岡は秀夫の肩に手を掛けて、一緒に寄宿舎を出た。山岡は盛んに寮歌を歌つて居たが、秀夫は稍々蒼白な顔をして居た。

その晩、カフェーのテーブルに對した秀夫は、全く別人のやうに變つて居た。彼は、玻璃盃のウキスキーを幾度もくぐ飲み乾した。皆はその一杯毎に喝采した。

「サア握手しよう」かう云ひながら山岡は秀夫の手を取つて「君も到頭本當の人間になつたのだ。僕は偽善者が一等嫌ひなのだ。内村鑑三は弟子達に偽善者丈にはなるな、と云ふさうだが、我意を得たりだ」と言ひながら握手を試みたりした。

秀夫は、もう先刻から五六杯もウキスキーを飲み續けた。彼は稍々濕んだ目をしてちつと、白いテーブル掛を見詰めて居た。

その晩から、激しい秀夫の變り方は皆を駭かした。彼は、毎晩先頭に立つてカフェーやバーを飲み歩いた。連中は、本郷に飽きてしまふと、銀座や浅草などへ河岸を代へた。

一度、ストインシズムの假面を脱いでしまふと、秀夫は誰よりも享樂主義者になつて居た。秀夫は山岡よりも、杉野よりももつと放埒に行動した。

皆は金に困ると本を賣つたり、質に入れたりした。しまひには、寄宿料や、賄料をスツカリ飲んでしまつたりした。秀夫は、盛んに學校中を巡んだ。山岡も杉野も負けない氣で休んだ。

その内に、秀夫は山岡や杉野の群を放れて行動する事が多くなつた。彼はよく何處かで酒を飲んで來て、十二時を過ぎてから歸つて來る事が多かつた。

山岡や杉野を初、同室の誰彼は皆秀夫の行動を憂慮し始めた。彼は、一學期の授業料を費消して、幾何督促を受けても收めなかつた。

其内、寮内に於ける秀夫の評判は段々悪くなつて來た。山岡は誰からか寮の委員が、秀夫の行動を怪しんで注意をして居ると聞いたので、彼は秀夫の爲に心配した。

杉野と山岡は、部屋を代表して秀夫に忠告した。すると秀夫は苦笑ひをしながら、「僕は出願金をやつて居るよ。が君達から忠告を受ける譯はないよ」と云つた。山岡と杉野は顔を見合して苦笑した。

秀夫は轉落し始めた石であつた。杉野や山岡のデカタン生活が、飲み歩く丈に止まつて居る間に、秀夫は何時の間にか、新しい歡樂の境を自分で開拓して居た。

二年の二學期が段々終に近づいて、校庭の櫻の蕾がふくらみ初める頃であつた。秀夫はある晩、不意に寮の委員室へ呼ばれて行つた。委員に呼び出される事は、何う考へても善い事ではなかつた。山岡や杉野は秀夫の爲に可なり心配した。秀夫は二時間も経つてやつと委員室から許されて歸つた。

彼は、

「やあ禁足だ、禁足だ、禁足一ヶ月に處せられちやつた。之で改心しないと、鐵拳制裁の上に除名だつて、人を馬鹿にして居やがる！」と云ひながら、彼は壁に掛けてあつた、外套を羽織るや否や足音高く外出した。

山岡や杉野などは呆氣に取られて見て居た。すると安本が、奮然として椅子から立ち上りながら、

「おい山岡！ 馳けて行つて相馬君を呼び戻して来い。今外出したら直ぐ鐵拳制裁ぢやないか。相馬君の墮落には君に重大の責任があるんだぞ。君の享樂主義の宣傳の結果を見ろよ」と嗚鳴つた。

「山岡は追ひかけさうにはしなかつた。すると安本は更に昂奮しながら、

「ぢや俺が行つてやる！」と云ひながら、廊下をどん／＼云はせながら、秀夫の後を追ひかけた。

「何うした、何うした」と訊いた。

「いや運動場へ連れて行つて、説教しようとしたが駄目だった。相馬君はかう云つたよ、俺は轉がりかけると取り止める事の出来ない人間だ、俺自身自分を何うする事も出来ない、と云つたよ。山岡！ 皆様が悪いのだぞ」と、安本は再び山岡に迫つた。山岡は蒼白な顔をしながら、日頃の饒舌にも似合はず黙つて居た。すると杉野は傍から口を出した。

「いや山岡君の罪ぢやないよ、僕達は皆相馬君の性格を誤解して居たのだ。あの人の清教徒的な假面の下に、天威の蕩兒が潜んで居たのだ。墮落して行くのは相馬君自身の素質さ」が皆は黙まつてしまつた。

山岡は黙つたまゝ、開かれて居る窓から校庭の闇をぢ／＼と見詰めて居た。

讀者諸君へ申上候

◎増刊號も辛く御覽の通りものに相成申候。儘に今春讀書界の最も讀み應へあるものと信じ候。思想的に國民奮闘の使命を果さんとする吾人の任務は、先づ此の増刊號を轉機として、更に一大飛躍を試みんものと、一同奮勵致居候。本號が思想界に異常なる貢獻を爲すべきはもとよりに御座候。

◎先頃募集せし大懸賞論文は已に姉崎博士の手をばなれ、目下吉野博士の手許にて検閲中に有之候。五月號若しくは六月號に於て發表し得べく候。多数の爲め意外の遅延は平に御宥し被下度候。御多忙中にも拘らず、熱心に檢閲の勞を召されざる兩先生の御厚志は感謝の外無之候

◎本號にて毎月發表すべき論文の募集に着手致候。こは縦論横議の一變化として、廣く讀者諸君の奮つて御投稿あらんことを切望致候。委細は別に掲出致置候間御覽被下度候。以上。

御用の方へ申上候

一、本誌編輯上の用件、新刊紹介、雑誌の寄贈等は必ずすべて「雄辯編輯部」宛に願上候。

一、特別の事情による原稿にあらざる限り、前々月二十日以前に非ざれば、御交渉には應じ難く候。

一、廣告其他營業に關する用件は必ず「大日本雄辯會營業部」宛に願上候。

俳句 和歌 大須賀乙字選 若山牧水選

心得 一、必ず自作の事 二、用紙は半紙の事 三、各紙に住所姓名明記の事、四、封皮には「雄辯」句稿若しくは歌稿と朱書する事五、締切は毎月末日とす。

◀ 價代誌本 ▶

冊	金	參	拾	錢	郵	稅	貳	錢
壹	前	金	八	十	錢	郵	稅	共
六	前	金	十	五	錢	郵	稅	共
十	前	金	十二	錢	郵	稅	共	

●海外は郵税一冊につき金十二錢(清國を除く)
●特價號臨時號は規定以外に代金を申受く
●切手代用の場合は三錢以下の切手にて必ず一割増

大正七年四月一日印刷納本 (本號に限り 定價六十錢稅三錢)
大正七年四月十日發行

編輯人 中尾倍紀 野間清治 博文館印刷所
發行兼印刷人 東京市小石川區久野町八番地
編輯所 東京市本郷區駒込坂下町四十八番地
發行所 東京市本郷區駒込坂下町四十八番地
大日本雄辯會
編輯部 東京市本郷區駒込坂下町四十八番地
電話 東京三九三〇番 小石川三三三番 七六番

取次販賣所
東京市本郷區駒込坂下町四十八番地 東京堂 同 京橋尾張町 至誠堂
同 京橋元數寄屋町 北陸館 同 日本橋本石町
同 京橋西紺屋町 良明堂
其他全國各書店雜誌店